

私には北海道に3人の親友が居りました。

その一人、森丹治さんは5年前84歳で亡くなりました。戦後紋別、網走、北見と根拠地として徒手空拳で立ち上がってきた快男子であり怪物でありました。私が北海道に買い付けに歩いて居た頃出会い、意気投合して以来の長い付き合いであり、商人根性の師でもありました。紋別の丘の上からオホーツクの海を眺めながら樽に氷漬けされた、たらば蟹のむき身は花が咲いたように美しく味もまさに絶品でした。

その彼がそっと見せてくれる手帳には、巨額の借入金とその返済期日がいっぱい書き込まれており、「秋さんよ！俺の役目はこの大借金を返していくことが仕事だよ！」とカッカと笑っておりました。

冬は雪に閉ざされるオホーツク海、北の涯の大地での逞しい生き様は、温暖な千葉県での私の苦労などはその比ではないことを教えてくれた終生の良き師でありました。

3月3日、4日と北海道から2通の訃報が届きました。1通は「父茂は88歳で人生を終えました。～略～父の遺言に若し自分が亡くなったら秋元様だけは必ず知らせてほしいと書かれてありましたので…」とありました。

高林茂氏と初めて出会った日は、冷たい粉雪が降るシカゴのホテルでした。窓の外を貨物列車が150両もの長い長い貨物車を曳いて走っていました。日本では見られない風景の中でありました。その夜は日本酒で一杯となりました。

以来30年、彼は日高山脈と帯広に挟まれた芽室と言うスイートコーンと酪農の小さな町の診療所の赤ひげ先生でありました。私が初めて訪ねた時に「あれは何だ！！」と思ったのは、広大な十勝平野に紫色のじゅうたんが広がり、その中央に帯広空港の滑走路が見えた事であります。ラベンダーの花畑でありました。

病弱の奥様を抱えられて「芽室の冬はマイナス20度、だるまストーブを抱いて寝ていても寒い」と冗談を言われておりましたが、千葉の私には想像つかない極寒の山村であります。

昨日、毎年送ってくれる野菜箱の中からメイクインが二つ出てきました。青白い芽が出ていますので、春になったら土へ戻してやろうと思っています。

もう一通は「NHKプロジェクトX」、フジテレビの「岬のドクター奮闘記」のモデルになった道下俊一先生88歳でした。

先生と最後の会話は「私は僻地を嫌い、札幌へ帰りたがった妻に来年はきっと帰るからと47年間妻をだまし続けて参りましたが、人口8千人の岬に立った1人の医師をしてこの人達を残して、どうしても帰れなかったからです。今度はやっと決心がつきましたので…」との電話でした。霧多布の海岸線は52キロメートル猛吹雪の岬です。救急車も無かったから湯たんぽを抱いて毛布をかぶって馬籠に乗って行きました。カルテの表には「食欲がない、咳が出る、お腹が痛い」と書いてあるけれど…しかしカルテの裏側にはその人たちの日々の暮らしがあります。夫婦関係問題、親子の関係、兄弟の問題、家族の悩み、苦労、お金の問題をカルテの裏側から発見できないと診療所の本当の医療は出来ないのですと述懐された先生達はもういられない。

会議所も私も決算書の表面を見るだけではだめだ！決算書の裏面にある本当の実態、悩み、苦しみを分ける会頭でなければ良き会頭にはなれないと教えてくれた北海道の赤ひげ先生達の冥福を祈りたい。